

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発生程度	
		現況	予想
普通期水稻	紋枯病	並	やや多
	トビイロウンカ(注意報第4号継続)	多	多
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多
	吸実性カメムシ類	並	並
いちご (育苗床)	うどんこ病	並	並
	炭疽病(<i>G.cingulata</i>)	並	並
	輪斑病	並	並
	ハダニ類(防除情報第10号)	やや多	やや多
	アブラムシ類	並	並
	ハスモンヨトウ	並	並
野菜花き共通	オオタバコガ(防除情報第11号)	多	多
かんきつ	青かび病、緑かび病	-	やや多
	ミカンハダニ	やや少	やや少
ぶどう	べと病	多	多
果樹共通	カメムシ類	少	やや少
茶	炭疽病	少	少
	カンザワハダニ(注意報第5号継続)	多	多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少
	チャノココクモンハマキ	並	並
	チャノホソガ	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
	クワシロカイガラムシ	並	並

【発生予報】 本文の()内は平年値

普通期水稻

1. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(114筆)の結果、発病株率は3.7%(4.5%)、発生圃場率は45.6%(42.0%)で一部多発圃場が認められた。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は33.0%(22.9%)であった。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤散布は株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に行う。

イ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への飛散がないよう十分注意する。

2. トビイロウンカ

平成19年9月3日付病害虫発生予察注意報第4号を継続

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(114筆)の結果、1株当たり虫数は0.39頭(0.25頭)、発生圃場率は50.0%(28.5%)であった(図1、2)。また、増殖率の高い短翅型雌成虫の発生圃場率が24.6%と高かった。これまでに長崎市、西海市、佐世保市、松浦市、対馬市において坪枯れの発生を認めた。今後他の地域も含め坪枯れの発生が増加することが予想される。

イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

平成19年9月3日付け病害虫発生予察注意報第4号を参照

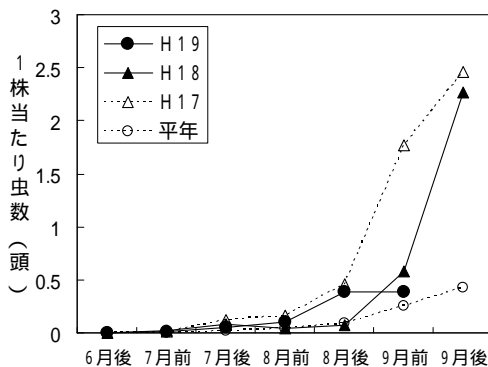


図1 1株当たり虫数の推移

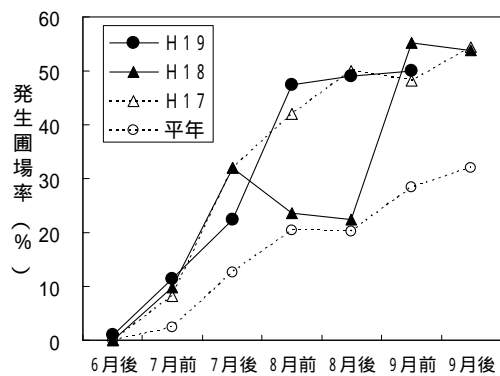


図2 発生圃場率の推移

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(15筆)の結果、幼虫の寄生株率は6.6%(11.9%)、株当たり虫数は0.6頭(0.7頭)、白変葉発生圃場率は60.0%(44.5%)であった。

イ 9月3日半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生株率18.5%(28.3%)であった。

ウ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、9月以降平年よりやや少なく推移している(図)。

エ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、新しい白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

ウ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への薬剤の飛散がないよう十分注意する。

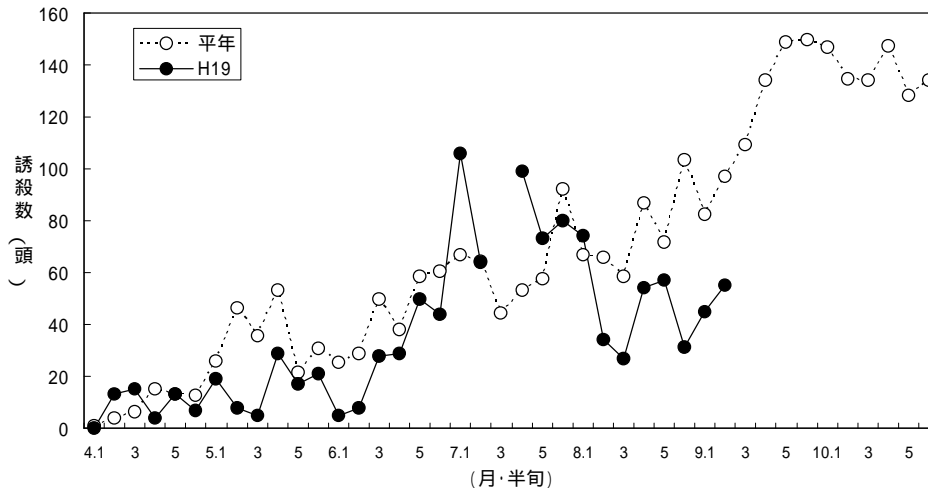


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市)
7月3半旬は台風により欠測
平年:H9~H18の平均値(最大・小値除く)

2. 吸実性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(15筆)の結果、寄生株率は0.4%(0.6%)、株当たり虫数は0.0頭(0.0頭)であった。発生圃場率は20.0%(14.8%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生は認めなかった(寄生株率1.1%、株当たり虫数0.0頭)。

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(32筆)の結果、発病株率は0.0%(0.0%)、発生圃場率は3.1%(0.8%)であった。

2. 炭疽病(*G.cingulata*)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(32筆)の結果、発病株率は0.5%(0.4%)、発生圃場率は15.6%(10.5%)であった(図)。

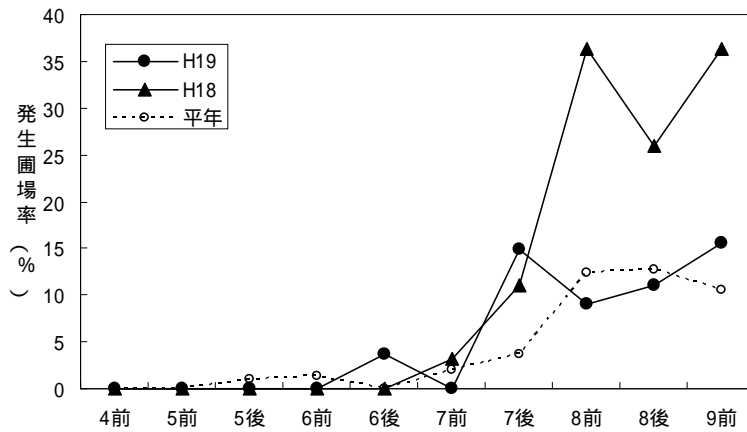


図 いちご炭疽病 (*G.cingulata*) 発生圃場率の推移
 平年: H9 ~ H18 の平均値

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(32筆)の結果、発生株率は4.0%(3.4%)、発生圃場率は34.4%(19.3%)であった。

4. ハダニ類

平成19年9月14日付病害虫発生予察防除情報第10号による

5. アブラムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(32筆)の結果、寄生株率は0.2%(0.5%)、発生圃場率は6.3%(7.0%)であった。

6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(32筆)の結果、被害株率は3.8%(5.3%)、発生圃場率は34.5%(56.4%)であった。

野菜花き共通

1. オオタバコガ

平成19年9月14日付病害虫発生予察防除情報第11号による

かんきつ

1. 青かび病、緑かび病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月以降の気温は、平年より高かった。

イ 向こう1か月間の降水量は平年並か多く、気温は高い見込みであり本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 収穫時の傷から感染しやすいので、果実にハサミ傷等をつけないように丁寧に扱う。

イ 樹上の傷害果や落下した果実は園外へ持ち出し処分する。

ウ 輸送中の発病を予防するために収穫前に十分量の薬剤を散布する。

エ 薬剤散布にあたっては農薬の使用基準を遵守する。

2. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(39筆)の結果、寄生葉率は4.4%(14.6%)、発生圃場率は43.6%(58.3%)であった。

ぶどう

1. ベと病

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(11筆)の結果、発病葉率は8.9%(2.2%)、発生圃場率は36.4%(25.0%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 菌密度の抑制や早期落葉の防止のため、収穫以降も薬剤散布を実施する。

イ 落葉は翌年の伝染源となるので園外へ持ち出し処分する。

果樹共通

1. カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる誘殺量は平年より少なく推移している(図)。

イ 後半のカメムシ類の羽化量の目安となるヒノキきゅう果の着生量は、平年より少～やや少であった。

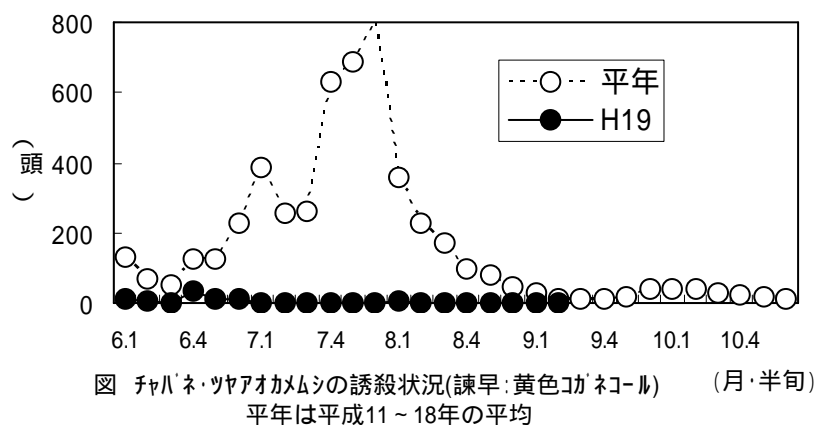
ウ 8月下旬のピーティング調査の結果、ヒノキの1枝当たりの寄生数は0.7頭(0.8頭)と平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多くの圃場では薬剤の散布は不要と思われるが、発生が多い園では、飛来初期に防除薬剤を散布する。

イ 飛来量や飛来時期は同一地域内でも園によって異なる場合があるので注意する。

ウ まれに被害があるミナミトゲヘリカメムシは、チャバネアオカメムシやツヤアオカメムシと異なる発生様相を示すので注意する。



茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたり発病葉数は1.8枚(12.2枚)、発生圃場率は40.0%(63.8%)であった。

2. カンザウハダニ

平成19年9月3日付病害虫発生予察注意報第5号を継続

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生葉率は2.7%(0.6%)、発生圃場率は55.0%(13.7%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。

3. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイに5回×4カ所)は3.8頭(11.3頭)、発生圃場率は50.0%(63.4%)であった。

4. チャノコカクモンハマキ

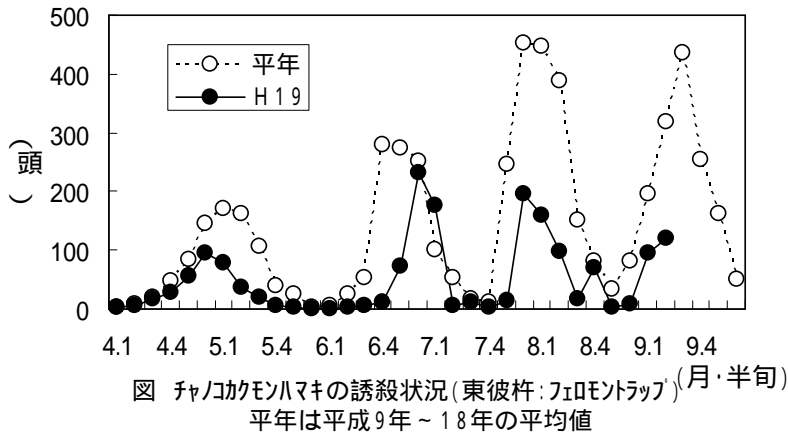
(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たりの巻葉数は0.3枚(0.2枚)、発生圃場率は25.0%(12.7%)であった。

イ フェロモントラップでの誘殺量(東彼杵茶業支場調査)は平年よりやや少なく推移している(図)。



5. チャノホソガ

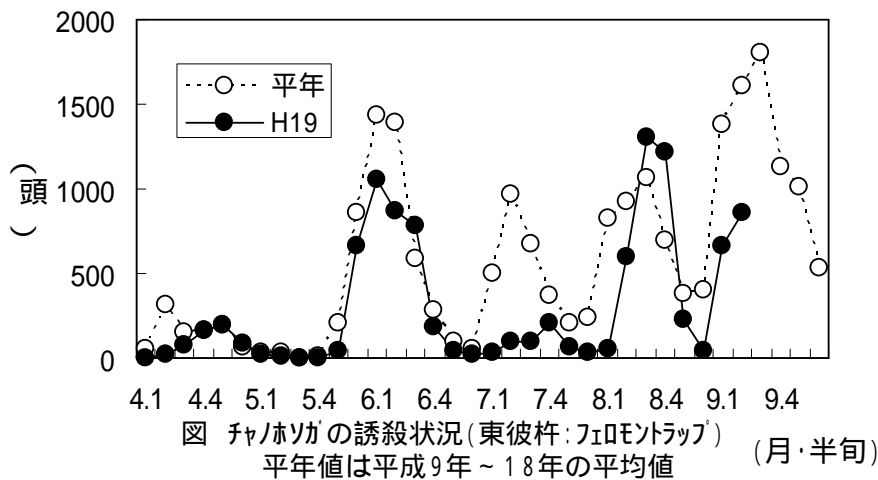
(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたりの巻葉数0.7枚(1.2枚)、発生圃場率は、35.0%(23.1%)であった。

イ フェロモントラップでの誘殺量(東彼杵茶業支場調査)は平年並で推移している(図)。



6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイに5回×4カ所)は1.6頭(0.6頭)、発生圃場率は40.0%(21.1%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。

イ 幼虫は葉裏にいることが多いので、葉裏にも十分薬剤がかかるよう散布する。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生株率は5.1%(6.1%)、発生圃場率は50.0%(23.5%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期当日～5日後に防除薬剤を散布する。ただし五島市はすでに適期が過ぎている。

表 クワシロカイガラムシ第3世代のふ化盛期予測日

地区名	東彼杵 赤木	東彼杵 太の原	世知原 板山	世知原 木浦原
平成19年	9/15	9/19	9/25	9/13

注1：ふ化盛期予測日は「有効積算温度則による防除適期予測法(東彼杵茶業支場)」により算出した。

注2：使用する気温データには、ながさき農林業情報システム500mメッシュ気象データを利用した。

注3：平成19年9月13日現在で予測し(1月1日～9月12日まで実測値)、9月13日以降のデータは過去10年間の平均値を利用した。

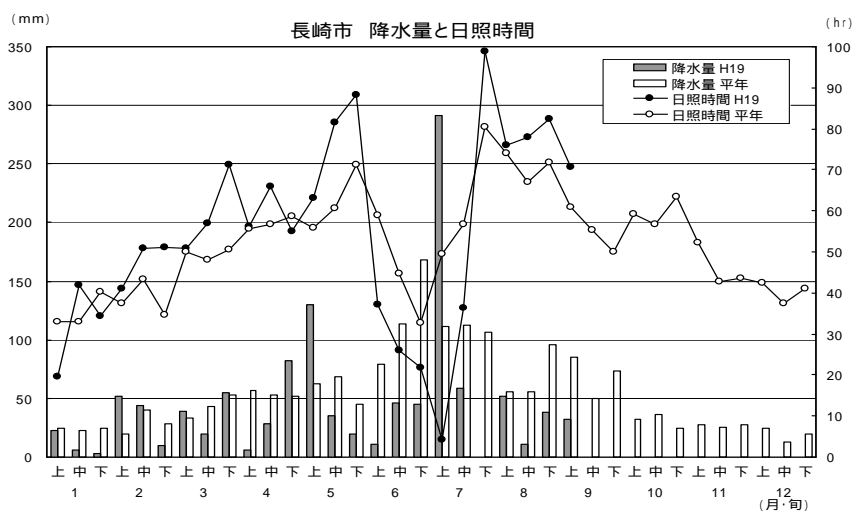
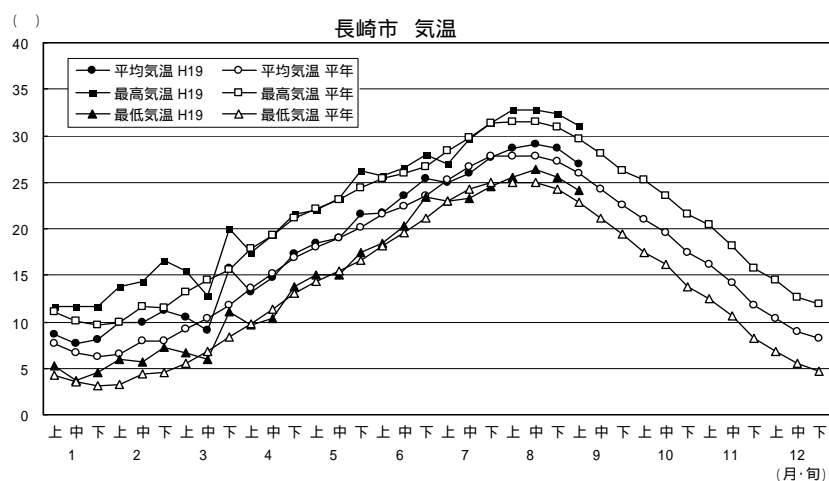
注4：第3世代の予測値は、現地調査による第2世代のふ化最盛期日以降の有効積算温度による(世知原 板山のみ第1世代のふ化最盛期日以降の有効積算温度による)。

【参考】

気象 (平成19年9月14日発表 1か月予報 福岡管区気象台)
要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	30	60
降水量	30	30	40
日照時間	40	30	30

予報対象地域：九州北部地域



「農薬使用基準の遵守について」

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルをよく読み、使用基準（適用作物、適用病害虫、使用濃度、使用量、使用時期、総使用回数）及び使用上の注意事項を守って、適正に使いましょう。

文中の市町村名は合併前で表記しています。

病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「防除所ホームページ」 アドレス：<http://www.jppn.ne.jp/nagasaki/>

「防除所ホームページ」を利用して、ながさき農林業総合情報システム（一部会員制
アドレス：<http://www.n-nourin.jp/>）やその他の情報を閲覧することができます。

この情報に関するお問い合わせは、電話またはEメールでお願いします。

長崎県病害虫防除所 TEL：0957-26-0027， Eメール：kngs0301@sp.jppn.ne.jp